第 367 号　　生徒さん・ご家庭・先生をむすぶ新聞

とらいあんぐる

2022 年 10 月

一音会ミュージックスクール発行

「地元自慢」

私は、一音会の教室がある「椎名町」という町に生まれ、以来、一度も他の場所に住んだことがありません。

大学にいたるまで、自宅から通い、就職しても、結婚しても、「椎名町」から離れることはありませんでした。

おそらく、死ぬまで「椎名町」に住み続けるのです。

「そんなに、椎名町が好きなのか？」といえば、そういうわけでもありません。

そして、こんなに長く住んでいますが、特別、愛着があるわけでもありません。

「椎名町って、どんな町ですか？」ときかれることがあります。

教室の場所をきかれた時などに、よく受ける質問です。

「いやあ、何もないところです」

半分は自虐です。でも半分は事実だと思っています。

椎名町を愛してくださる方がいたらごめんなさい。「本当に何もないなあ」とつくづく思っています。

実際、「何もないです」というと、皆さん、同意してくれます。

「いやあ、池袋からひと駅で、こんなに何もない駅があるんですね」

「駅前のロータリーでタクシーをひろおうと思っていたんですが、車もないですね」

「駅前にマクドナルドがない駅ってめずらしいですね。東京なのに」

何もない、という話で、むしろもりあがります。

私は、人前で地元自慢をしたことがありません。

そのかわり、地元の悪口は、たくさんいってきました。

そう、私は自分の育った町が好きではないのです。

幼稚園も小学校も中学校も地元でしたが、すべて大嫌いでした。

それでいて、他の人の故郷の自慢話をきくことが好きです。故郷自慢をする人も好きです。

その人の幸せな子ども時代が透けて見えるようで、きいている自分も、幸せな気持ちになれます。

地元を愛せる人は、幸せな人生をおくってきた人なのでしょう。心の底から、うらやましく思います。

そう考えて、ふと「地元を愛せないのは、良くないことなのでは？」と思うようになりました。おおげさにいえば、自分の人生を肯定できないことなのでは？と。

そこで今回、生まれてはじめて、地元自慢をしてみたいと思います。

なんといっても私には「とらいあんぐる」という、発言の場があります。

おそらく最初で最後になりますのでどうかおつきあいください。

私の生まれた家は、豊島区の南長崎というところにありました。

その近くには、「第一マーケット」という鬼の巣窟のような憎むべき店があり（「とらいあんぐる」３２２号参照）、その裏に汚いアパートがありました。

２階建て木造の、よくあるボロアパートです。

そのアパートの名前は、「トキワ荘」

といいました。

私の子ども時代は、ただの汚いアパートでしたが、そのボロアパートが、のちに非常に有名なアパートとなります。

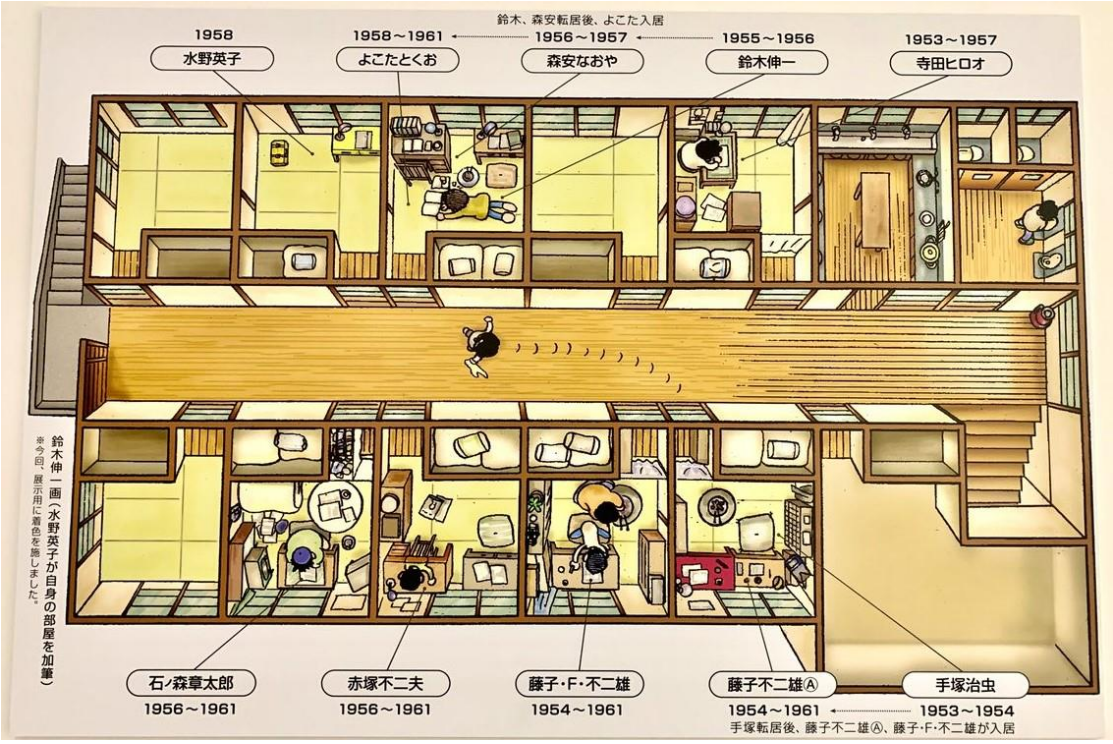
住人の中から、手塚治虫先生、藤子不二雄先生、石ノ森章太郎先生、赤塚不二夫先生といった、日本を代表するマンガ家を次々、輩出していくのです。

外見は、ボロアパートのまま、ここを出発点として、「鉄腕アトム」が生まれ、「火の鳥」が生まれ、「ブラックジャック」が生まれ、「ドラえもん」が生まれ、「怪物くん」が生まれ、「オバケのＱ太郎」が生まれ、「サイボーグ００９」が生まれ、「天才バカボン」が生まれ・・・数々の有名な作品が生まれ、日本のマンガ文化の“聖地”となりました。

ボロアパートのまま、です。

このトキワ荘に関しましては、たくさんのマンガで扱われているのはもちろん、書籍や映像作品にもなっていますので、くわしい紹介は省きます。

トキワ荘は当時、たまたま、有名なマンガ家さんが住んでいた、というわけではなく、合宿所のような機能を果たしていたようです。



すでに連載を持ち、創作の苦しみをかかえる者同士が、共同生活の中で、悩みを共有し、アイデアを出しあい、時に互いのアシスタントをつとめながら、運命共同体として生きてきた場です。

たとえば、「オバケのＱ太郎」という藤子不二雄先生の作品があります。

実は、藤子Ｆ先生がＱ太郎を描き、藤子Ａ先生が正太を描き、北見けんいち先生が背景を描き、石ノ森章太郎先生とつのだじろう先生がその他の登場人物を描いていたということが知られています。赤塚不二夫先生のキャラクターも出てくるので、おそらく赤塚先生も飛び入り参加していたのでしょう。

トキワ荘がなければ、生まれることのなかった作品です。

彼らの信頼関係、そしてお互いの才能を認め、お互いを高めあう幸せな日々を想像すると、胸があたたかくなります。

そんなトキワ荘ですが、老朽化はまぬがれません。第一、私が子どもだった頃、すでにボロボロでした。

１９８２年に、残念ながら、トキワ荘は取りこわされてしまいます。

私は子ども時代、手塚治虫先生を、心から崇拝していました。今も崇拝しています。神様だと思っています。

実は、私がものごころついた時、手塚先生はすでにトキワ荘を出てしまっていたのですが、トキワ荘を見上げながら「ここに、あの手塚治虫先生が住んでいたのだ」と思うと、自分の奥底から不思議な力がわいてくるのを感じました。

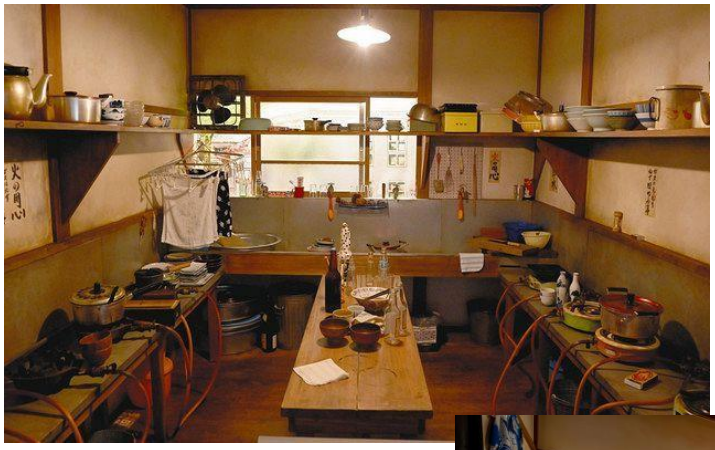
「私もがんばらなくちゃ」と思ったものです。

そのトキワ荘がなくなる！

当時の喪失感は、自分の母校がなくなるより、はるかに大きなものでした。

それから４０年近くが経った２０２０年、トキワ荘を忠実に再現する建物が完成しました。名前を「トキワ荘マンガミュージアム」といいます。

マンガ家の先生方が生活した部屋の内部まで、忠実に再現しています。



← 共同炊事場

ある先生のお部屋 →

この「トキワ荘マンガミュージアム」が開館したのは、今から２年前、コロナのまっただ中でした。このタイミングの悪さも、椎名町らしいところです。

それから２年、コロナ騒ぎも落ち着き、私は先日、「トキワ荘マンガミュージアム」に足を運びました。

開館２周年ということで、企画展をやっていたのです。それは『漫画少年』という雑誌を全巻展示するという企画展でした。

実は私は、見たいものがあって、足を運んだのです。

私が子どもだった頃、私が愛読書の「火の鳥」を読んでいると、私の母は決まって自慢話をしたものです。

「お母さんね、昔、手塚治虫先生に直接お会いして、インタビューをしたことがあるのよ」

「うそだあ」

私は信じていませんでした。

しかし、くわしいいきさつは知らないのですが、どうやらこれは本当らしく、その記事は『漫画少年』に掲載されている、というのです。

確かめる時が来ました。

若い日の母を、ここで見ることになろうとは！

展示された記事の中の写真に、母がいます。一番左の女性は、母の姉です。

その隣が、母その人です。母は中学生ぐらいに見えます。

写真の中の母に、話しかけます。

「お母さん、うたがってごめんね」

「本当だったんだね」

インタビュー記事は長く、４ページにもおよんでいました。

「手塚先生と、こんなにいろんな話をしていたんだね」

マンガをあまり好まない母でしたが、手塚先生の作品だけは、すべて買い与えてくれました。それは、母にとっても手塚先生が神様だったからなのだと知りました。

「トキワ荘マンガミュージアム」は、「ひびきホール」の並びにあります。歩

いて数分の距離です。

「ひびきホール」の前の道は、実は「トキワ荘通り」と呼ばれ、「トキワ荘マンガステーション」や「トキワ荘お休み処」など、トキワ荘にちなんだ場所がいくつもあります。

「トキワ荘マンガステーション」は、どういう仕組みで成り立っているのか、まったくナゾなのですが、約６０００冊ものマンガを取りそろえていて、すべて無料で読めます。ナゾです。

もうすぐ「ひびきホール」で「音楽の集い」を開催します。

もし、お気が向いたら、トキワ荘も見ていってください。

慣れない地元自慢をして、私は今、とても高揚しています。

椎名町も悪くない・・・。そんな気持ちになることができました。

（江口　彩子）

手塚先生をかこんで

「まる子さん、宝塚の手塚治虫先生が、東京へいらっしゃいますよ」

「あら！　それでしたらわたくし、お目にかからしていただきたいわ」

編集長のおことばに、私は思わずそう申しました。

「よい機会ですから、まる子さんが愛読者のみなさんにかわって、先生からいろいろお話をうかがうといいね」

私はその日から、胸がもうどきどきしてしまいました。うれしいからでしょうか。それもありますけれど、ほんとうは、私はあんがい心臓がよわいからです。

同行は、愛読者の加藤実夫さんと弟さんの暢夫さん、江口謙子さんと妹さんの恵子さんの四人です。それに、先生とおしたい編集のM先生もごいっしょに行ってくださることになったので私はきゅうに心づよくなりました。そこで、さくらの花びらがゆめのように散りかかる坂道をのぼるとき、私は一言の調辞？をいたしましたの。

「先生には、なんでもいきいきとおたずねし、はきはきと答えましょうね」

ひかどの婦人記者のたまごとしての貫禄をしめしたつもりなのよ。

さて、長いろうかをごあんないされて、私たちは先生のおへやの前に立ちました。とたんに、おへやの中から、

「やあ、トンチ教室のまる子先生ですか。お待ちしてました。どうぞ」

とお声をかけられて、私はすっかりどぎまぎしてしまいました。

まっ白いワイシャツにみどり色のネクタイをむすばれた先生が、めがねのおくの目をにこにこさせて、むかえてくださいました。やさしいおにいさんという感じがいたします。

床の間には、トランクや画用紙、絵のぐなどがこぎやかにおかれ、うつくしいカーネーションが二本、そばの花びんにさいております。

私はまず、四人のみなさんを先生にご紹介して、テーブルをかこみました。

M先生が、私の方を見

◆「音楽の集い」を開催します

１１月３日（祝）は、おとなの方の発表会、「音楽の集い」の日です。

この３年、教室は新型コロナに振り回されっぱなしですが、一番、影響を受けているのが「音楽の集い」です。一昨年は中止とさせていただきました。昨年は、無観客開催でした。おとなの生徒さんには、申し訳ない状況でした。

ですが今年、久しぶりに有観客で開催させていただきます。

たくさんの方にお申し込みをいただき、過去最多の参加者数となっています。たいへんうれしいことです。

日程：２０２２年１１月３日（祝）
時間：１２：３０開場　１３：００開演
場所：「ひびきホール」

多くの方にご参加いただくことになり、想定より長い会となりそうです。終演時間は、１８：３０頃になる予定です。

その時間まで会場にとどまることが難しい方は、動画でごらんになってください。客席の密を避ける目的で、今年は動画も配信いたします。

動画は限定公開です。無関係の方に見られる心配はありませんが、そのかわりご視聴にはお申し込みが必要です。ご視聴をご希望の方は、「ショパンはうす」受付もしくは一音会本部まで、お申し込みください。ご視聴は無料ですが、一音会の関係者の方にかぎらせていただいています。

なお、講師演奏も予定しています。通常、講師演奏は一番最後におこなうものですが、今回は時間が長くなるため、中盤、１５：３０頃、演奏予定です。松本季先生・松本和先生による２台ピアノです。どうぞお楽しみに。

＜ 講師演奏 曲目 ＞　２台ピアノのためのロンド ハ長調　作品 73　ショパン

◆「ピアノ・トライ」お申し込みのシーズンです

今年も「ピアノ・トライ」をおこないます。すでに、担当の先生から曲をもらい、練習に入っている生徒さんも、多くいらっしゃることでしょう。

「ピアノ・トライ」は、エチュードやバッハの作品といった、基礎力やテクニックにごまかしがきかない曲を課題曲とし、普段のレッスンの先生ではない、ベテラン先生が、お一人お一人の弾き方や表現や練習に問題がないか拝見し、さらに上手になっていただくためのアドバイスをお出しするものです。

ピアノ発表会の目的は、大きな舞台で普段の力を出すこと、です。演奏について、普段の先生以外の先生がアドバイスをさせていただくことはありません。

「ピアノ・トライ」の目的は、普段の練習を見直し、さらに上手になっていただくこと、です。

先号でもお知らせしましたように、今年は「対面式トライ」と「動画式トライ」の両方をおこなう、ハイブリッド方式です。

お申し込み方法や期日につきましては、お知らせする内容が多いため、今回、別紙を作成いたしました。そちらをご参照ください。

◆元気に冬をのりきりましょう

厳しかった夏の暑さも過去の話となりました。このところ、急に気温が下がり、そのせいでお風邪をひいてしまった生徒さんやご家族の方も多いようです。

この冬は、新型コロナに加え、インフルエンザも流行する「同時流行」のおそれがあると、先日、厚生労働省が警告を出しました。

マスクの着用義務が緩和されていくこれからの時期、ありそうな事態です。一音会では、皆さまのご不便を考えつつも、従来の「年少さん以上は、マスクを着用」のルールのままいきたいと考えています。音を出すレッスンの都合上、レッスン時間内の寒気が難しいこと、建物の気密性が高いことが理由です。引き続き、皆さまのご理解とご協力を、よろしくお願いいたします。

＊＊

＊スクールの生徒さんのご質問を、以下の２つの方法で受け付けています。

メール：ichionkai.piano@gmail.com　　電　話：03-3954-9999

＊お電話での質問時間は、毎週月曜日の午後７時～9 時です。ただしレッスンがお休みの日は、質問もお休みとさせていただきます。

＊ご質問は、お一人でも多くの方のご質問にお答えするために、お１人 10 分を目安とさせていただいています。ご了承ください。